

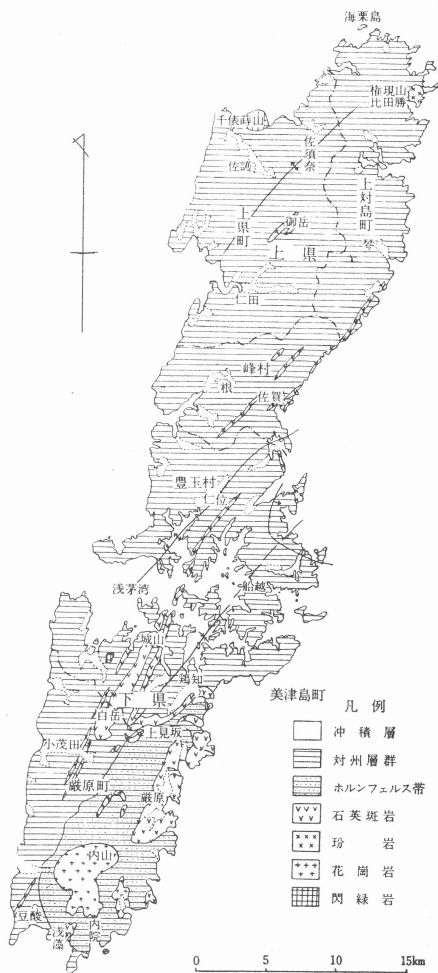
50. 対

馬

- 地 域** 対馬全域（上県郡・下県郡）
- 交 通** 九州郵船 博多—厳原；小倉—比田勝
対馬交通・北対馬自動車・バス路線
- 地形図** 泉・佐須奈・仁位・厳原・久和・小茂田・豆酸
(1/50,000)

対馬の地形は起伏にとみ、多くの谷にきざまれ、また浅茅湾に代表される溺谷の発達が著しい。これは、低くなだらかにひろがった壱岐の玄武岩台地地形とは、きわめて対照的である。対馬の山地には、全般的に山頂に平坦面のあることが、これまでしばしば地形学者の注意をひき、隆起準平原と考えられている。切峰面図によると、浅茅湾の北の上島においては、200—250mの平坦面がよくあらわれ、御岳の細長い峰は480mの等高線でかこまれ、残丘となってまわりより突出していることが認められる。また、南の下島では、上島ほどよく平坦面はあらわれず、平均高度も大きい。これは、火成岩体の分布も広く、また東側3分の2の地域は、けつ岩を主とする堆積岩が熱変成作用を受けてホルンフェルスとなり、堅い岩石となって、浸食に抵抗しているためであろう。西側の3分の1の非変成地帯には、上島と同じように200—250mの平坦面がよくあらわれている。また、中間の浅茅湾周縁山地には、50—100mの低い準平原が認められる。

とくに変わった地形としては、下島の内山盆地があげられる。盆地内には花こう岩が露出し、まわりを取巻く山地は堅いホルンフェルスでできている。花こう岩体が浸食によって地表にあらわれると、深層風化作用によって、いわゆるマサ（真砂）となり、浸食が急速に進み、盆地や谷ができるようになる。長崎県内では、この対馬の



対馬地質図

(佐藤伝蔵, 1907, 1908 ; 上原幸雄, 1959 ; 沢田秀穂・喜多川庸二, 1961 ; 北村信, 1962 及び東邦亜鉛対州鉱業所資料により鎌田編図)

内山盆地と、五島列島福江島の中央の山内盆地が、いずれもこうした花こう岩の浸食盆地の好例である。

対馬の海岸地形のうち、最も特色のあるものは、浅茅湾のリアス海岸である。細かに浸食された谷への海進により、出入のはげしい湾入が発達した上、湾内では外洋の波浪の破壊作用をまぬがれているため、リアス海岸の原型がよく保存されている。湾内の島山島は骸骨島のよい例である。また浅茅湾を内と外に2分する、四十八谷～飯盛山～鶴山～城山を結ぶ線は、石英斑岩の貫入岩床がつくるケスタ地形の連続であり、その南の延長には白岳がそびえている。また洲藻浦の入口にそそり立つ鋸割岩（鋸分岩）や、敵原港のシンボルの内亀岩は、ともに石

英斑岩の海食崖で、対馬の二大岩壁といえよう。

対馬にはまた、隆起による海岸段丘も発達する。とくに上島北端部の比田勝の殿崎や舌崎などは見事な海岸段丘である。海栗島、海老島なども低い段丘の島である。下島の南西端、豆殿崎の先端には波食台が作られている。波でけずられている岩が、ゆるく傾斜した板状のけつ岩であるため、宮崎県の青島の「鬼の洗濯板」にも似た現象が見られるのは面白い。

対馬をつくる地質の大部分は、対州層群とよばれる第三紀層である。古くは、中生層と考えられたことがあったが、第三紀型の貝化石や植物化石が発見され、中生代に属する岩石の存在は現在は考えられない。

対州層群は、整合に重なる非常に厚い地層で、5,000m以上もの厚さをもっているようである。地層は主に黒灰色のけつ岩によってつくられているが、これに砂岩がはさまる場合が多い。けつ岩と砂岩の互層が傾斜している所では、砂岩の地層面が広く地表にあらわれ、ケスタ状の微地形を生じている。けつ岩の露出面においては、気温の変化によって起る膨縮のため、細長い先のとがった破片となっただけ。その特有な割れ方を、「剣尖構造」とよぶ人もいる。日当りのよい崖の下に、この剣尖状のけつ岩がたまっているのは、よく見かける現象である。また砂岩層の上面や下面に、堆積の際に生じた水流の痕跡を見かけることが多い。上面には漣痕れんこんがつき、下面にはソールマーク（底痕、ソールは足裏の意）とよばれる、水底の水の流れによって、泥をかきとった跡をうめた砂の型が残されている。

対州層群から産出する動物化石には、泥質の海底に好んですみ種類の貝・ウニ・クモヒトデ類がある。対州鉦山の坑内で貝化石が採集されたこともあるが、地表では、美津島町一帯に比較的多くの化石が含まれている。また植物化石についていえば、巖原町小茂田の南の上槻こうつきは、古くからよく知られた産地で、亜熱帯～温帯的要素で構成された14属21種の葉の化石が報告され、この中にはトクサの化

石種も含まれている。また若田硯の原石の産地である。巖原町若田からはシュロの化石が採集され、タイシュウシュロと命名されて、今は巖原町立対馬郷土館に保存されている。

対州層群に貫入する火成岩には、黒雲母花こう岩、せん緑岩、石英斑岩～流紋岩がある。黒雲母花こう岩は、内山盆地に広く分布して、「内山花こう岩」とよばれ、絶対年数は 12×10^6 年前（中新世後期）と測定されている。内山では特有な浸食盆地をつくっていることはすでに述べた。この花こう岩の延長部は、下島南岸の久和、内院、浅藻に注ぐ川の流域や、日掛より南に入る佐須川ぞいに露出する。これらは、一連の花こう岩底盤の頭をおおっていた対州層群が侵食により刻みこまれた所で、顔を出してきたものである。

下島の^う豆^ま酸より佐須川中流の^つ経塚をへて、美津島町^つ鷄知に至る線より東側は、内山花こう岩の貫入の影響を受けて、対州層群のけつ岩がホルンフェルスとなり、紫味を帯びたきわめて堅い岩石となっている。^か上見坂に登る道路ぞいには、このホルンフェルスの^か露頭に恵まれている。

石英斑岩の著しいものには、城山～遠見山～白岳を結ぶ線に分布する「白岳石英斑岩」があり、対州層群の中部層に岩床状に貫入した火成岩体である。
(鎌田泰彦)